



井の頭池 初

オオバンの子育て

2023年、水鳥のオオバンが井の頭池で初めて繁殖した。都内ではオオバンの繁殖例は珍しく、大勢の来園者が約3ヶ月にわたり子育ての様子を見守った。



オオバンの巣とヒナ (6月9日)

初めての繁殖確認

オオバンは井の頭池には冬鳥として渡来している。かつては観察する機会は少なかったが、近年は20〜30羽が越冬するようになった。通常は4月までに渡去するが、2023年は春を過ぎても2羽がとどまり続け、お茶の水池で5月に造巣が確認された。

オオバンは水辺のヨシなどの茂みに枯れ草を集めて球状の巣をつくる。井の頭池では何度か巣の位置を替えながら居所を定め、産卵した。抱卵開始から約22日後、親鳥とは異なるタワシのような姿のヒナが誕生。お茶の水池全域を親子でゆつくりと移動しながら生活するようになった。園路に近い浅場で休憩しているときには多くの来園者がスマホでの撮影を楽しんだ。

7月中旬頃になるとヒナの体格も大型になり、行動範囲は弁天池やポート池にまで広がった。今年は工事のためにポート営業が休止中だったこともあり、オオバンにとって池を広々と利用している様子であった。

都内での動向

東京都内ではオオバンの越冬数は増加傾向にあるようだ。1990年代には湾岸部などを除けばあまり観察できなかったが、現在では内陸部でも普通に観察できるようになった。ただしこれは越冬期についての話で、繁殖期となると事情は異なる。

都内ではオオバンの繁殖例は少なく、近年は散発的な繁殖例があるのみで、絶滅の恐れのある動植物をまとめた東京都レッドリスト2020では絶滅危惧1A類に選定されている。

こうした中、井の頭池では2014年以降、かいぼりを軸とした水辺再生の取組によってオオバンが繁殖できる環境が整ってきたようだ。営巣環境になるヒメガマなどの抽水植物の茂みが拡大し、好適な食物になる沈水植物も豊富に生育するようになった。都内ではオオバンの生息環境である湿地環境が減少している中、新たに繁殖地になったことは特筆に値する。(裏面に続く)



並んで羽繕いをする親子 (7月17日)



アメリカザリガニ防除の状況

井の頭池では毎年4月からアメリカザリガニ防除を行っています。2023年は池全体に196個のワナを設置し、毎週1回、ワナを回収しました。11月にすべてのワナを撤収し、今シーズンの捕獲作業を終了しました。

今期のアメリカザリガニの捕獲結果は、総捕獲数23520匹で、ワナ(遮光カゴ)1個あたりの捕獲数は2.3匹となりました。前年度はザリガニの捕獲数が跳ね上がり、これまでの最多数に増加してしまいました。今期は前年以下の水準となったものの、生息密度が高い状態が続いています。

アメリカザリガニはイノカシラフラスコモなどの水草や水生昆虫を捕食し、井の頭池の生物多様性にダメージを与えます。井の頭池でも捕獲効率の高いワナへの交換を毎年進めているところです。引き続き野外科体への防除圧を強めていきます。

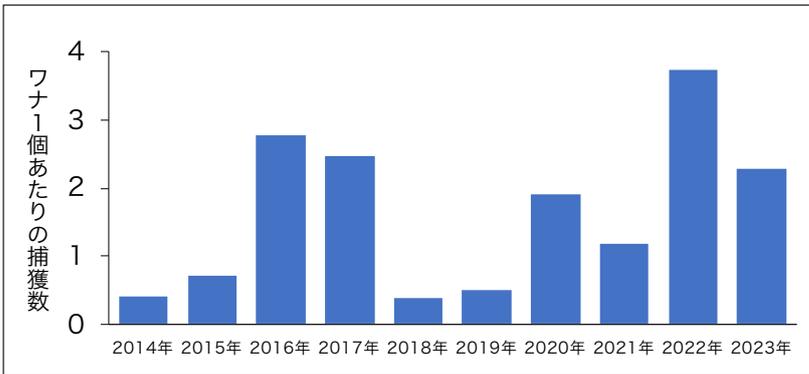


図. 遮光カゴ1個あたりのアメリカザリガニ捕獲数の推移

ただし沈水植物についてはこの数年のうちに、絶滅危惧種のツツイトモやイノカシラフラスコモから外来水草のコカナダモへの置き換わりが認められている。オオバンは沈水植物の在来・外来を区別せずに利用している可能性もあるが、かいぼりによって再生した良好な環境が悪化するのではないように留意していくことが重要である。



糸状藻類を食べるオオバンの親子

いけいけ！かいぼり隊 ～いっしょにザリガニ防除！の巻～

かいぼり隊と一緒にアメリカザリガニ防除をやってみる人気企画『チョッコツとかいぼり隊』が6年ぶりに再登場した。2023年6月からアメリカザリガニの野外放出や頒布などが禁止されたこともあって関心が集まり、計9回のイベントは満員の回が続出した。一緒に作業するかいぼり隊もやりがい十分だ。

行事ではまずアメリカザリガニが水草や水生動物にどのような被害をおよぼすのかを学び、チームごとにワナの回収に出発する。定番のワナ「遮光カゴ」や、アメリカザリガニ専用のBOXタイプのワナを回収し、アメリカザリガニを捕獲していく。



遮光カゴをかいぼり隊と一緒に引き揚げ！



どんな生きものがどれくらい捕れたかを記録

ワナを引き揚げると、これまでの活動の成果もあり、アメリカザリガニよりも在来種のエビや魚の方が多く捕れていることも多い。大きなモクスガニが見つかる歓声が上がる。

こうした行事が、かいぼり後の池の状況を知り、体験を通して井の頭池を学ぶ機会になっている。

今号のイチオシ！

自然情報



カンエンガヤツリ

線香花火が弾けたような形の実をつける大型のカヤツリグサ。水位変動などの攪乱でできた泥地に生育し、環境が安定すると姿を消します。井の頭池では毎年湿地を手入れして生育環境を維持しています。お茶の水池等の浅場で見ることができます。

環境省レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類、東京都レッドリスト 準絶滅危惧(北多摩)